

ハート  
「心臓」で読み直す漱石Kuwahara R i e  
桑 原 理 恵

## 一 はじめに—「地上」と「天上」、「頭」と「心臓」

「彼は鋭い頭脳<sup>ヘッド</sup>の為に地上を見ずにはみられないながら、やはり柔かい心臓<sup>ハート</sup>の為に天上を見ずにもみられなかつた」。芥川龍之介のよく知られた国木田独歩評である（『文芸的な、余りに文芸的な』）。鋭い「頭」と柔かい「心臓」を持つゆえの「頭」と「心臓」の葛藤に独歩の本質をみた芥川のこの言説のなかで注目すべきは「頭」すなわち理知は飽くまで「地上」のものであり、「心臓」こそ「天上」に属するとする点である。この考えはデカルトが『情念論』で述べたことと等しい（心臓と感情を繋ぐ動物精気説）。この「頭」と「心臓」の相克は芥川の師漱石に顕著なテーゼとして『それから』代助、『彼岸過迄』須永、『行人』一郎、『こころ』先生とKなどに見出せる。

テキスト論時代を代表する小森陽一「「こころ」を生成する「心臓」」（『成城国文学』1号1985、現在ちくま文庫『こころ』解説）が日本近代文学研究に与えた衝撃は大きかった。

「奥さんは私の頭脳<sup>ヘッド</sup>に訴える代わりに、私の心臓<sup>ハート</sup>を動かし始めた」（上十九）を手がかりにした詳細な分析で「先生」の死後に学生の「私」と「奥さん」が結ばれるとの解釈を提出したからである。旧論者たちの反発に加えこの解釈のみに注目が集まったことで小森論文が示した「心臓」や「血」をめぐる新たな議論の可能性は、その後の『こころ』研究から置き去られた感がある。「明治の精神に殉死」（下五十六）するとの「先生」の言葉を乃木大将の殉死への共感と捉え「先生」の死を美化する従来の読解は、『こころ』が「父性的な絶対価値を中心化する、一つの国家的なイデオロギー装置として機能することになってしまった」（前掲論文）として、小森氏は疑義を呈した。「先生」の生き様は乃木の対極にあるもので、明治国家に仕組まれた天皇とその赤子の擬似家族国家という「血」の論理を否定し、「家族の領土の一員には決してなることのない、自由な人と人との組合せを生きること」（前掲論文）であると主張する。

本論の目的は、小森論文と概ね同方向の読解を補強するために、漱石のキリスト教受容の独自性に切り込む方法で新たな問いを立てることにある。その延長線上の問いとして、「先生」の自決は乃木大将と同じ日本伝統の十文字割腹であったか否か。キリスト教的西洋を胸文化（<sup>the sacred heart</sup> 聖心）、日本的東洋を腹文化（<sup>guts</sup> 赤心）と大きく分けした場合、乃木の切腹は明治帝へ赤心の誠と忠義を証する行為だが、「先生」の自決は同義か。こうした問いが浮上する。本論では、先生の言葉「とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」（上十三）等から「神聖」あるいは聖なる愛の意味を西洋文脈で探る。また『それから』の代助は幾度も「<sup>セイント</sup> 聖徒の如く、胸に手を当て」（十三）る。このポーズは西洋由来に違はなく、心からの誠実を「<sup>ハート</sup> 聖心（イエスのみ心）」に誓うキリスト教由来のしぐさである。論者には『それから』の縦糸は「自然の愛」、横糸は代助の口を借りた西洋近代批判であり、

縦・横ともキリスト教由来のテクスチャーにみえる。

これまで漱石と<sup>Pre-Raphaelite Brotherhood</sup>ラファエル前派に代表される世紀末芸術の近接性を多数の論者が指摘してきた。<sup>Pre-Raphaelite Brotherhood</sup>ラファエル前派は<sup>Brotherhood</sup>宗教芸術兄弟団、<sup>Brotherhood</sup>兄弟団とは元来宗教的<sup>Brotherhood</sup>秘密結社の呼称であり、彼らは仲間内だけで了解する頭文字「P. R. B.」と署名する<sup>Brotherhood</sup>秘密結社であった。漱石は正統キリスト教に違和感を持つ一方で、<sup>カノン</sup>正統の<sup>ドグマ</sup>教義に<sup>エゾテリック</sup>反逆するP. R. B.の<sup>エゾテリック</sup>秘教的宗教芸術には深い共感を以て受容したことが、漱石のキリスト教受容の特異性であると論者は考える。<sup>Pre-Raphaelite Brotherhood</sup>ラファエル前派の芸術運動は「懐古か、反逆か」のキャッチフレーズに集約されたとおり<sup>ゴシックリバイバル</sup>中世懐古趣味であるか見え、本質はキリスト教道徳を振りかざす<sup>フラムフタル</sup>ヴィクトリア朝社会に対する批判、いのちと魂をがんじがらめに縛りつける<sup>フラムフタル</sup>男性原理キリスト教の暴力性への反逆である。P. R. B. 運動のアイコンとしての女性原理の象徴が「聖杯の乙女」（図版③）でありP. R. B. が標榜した<sup>フラムフタル</sup>秘教的本質は女性性・魂の復権であった。これを従来の男性原理で解釈すれば世紀末芸術を席卷した「宿命の女」すなわち男性の人生を狂わせる魔性の女、近代の魔女となる。

かつて江藤淳が『漱石とアーサー王伝説』（1975）で「薙露行」を漱石と嫂の関係から「罪」と「死」の主題として憶測した業績は多分に江藤の直観に基づくもので、事実関係を詰める手際に異論を挟む余地があったように思われる。しかし、漱石の内的傾きとしては明確に諸作品から読み取れるものである。社会の掟と対峙する自然の愛・運命の愛といった問題意識は、漱石テキストに通奏低音のように流れている。たとえば『草枕』で画工の「余」が那美さんと読書するメレディス『ピーチャムの生涯』はパオロとフランチェスカがランスロットとギニヴィアの不義の逢瀬をなぞる行為であるし、『三四郎』広田先生が森有礼の葬列の少女の夢、美禰子が三四郎との別れ際に呟くダビデ王の懺悔の言葉、『行人』一郎の妄想的苦悩である妻お直と弟二郎の関係、女景清に模した盲目の老女、不実な夫のため心を病んだ若妻の逸話、「趣味の遺伝」のロミオとジュリエット、エレーンとランスロットの例示など、漱石テキストの過半数が射程に入る議論である。

本論ではおもに『それから』『行人』『こころ』を扱う。「頭」で統御する人生を「心臓」から揺さぶられエゴを打ち砕かれ、変わらざるを得ない何かに巻き込まれていく<sup>パッション</sup>受難パターンを「<sup>ハート</sup>心臓」を手掛かりに読み直す試みである。なお心臓研究の先端では、心臓が発する感情の電磁波は脳をシンクロさせ身体<sup>ハート</sup>の細胞全てをシンクロさせること、心臓が発する電磁波は近くの他者の身体にも到達することが米国ハートマス研究所により解明されている。

## 二 「<sup>エゴ</sup>頭」を去って「<sup>ハート</sup>心臓」をひらく―則天去私

『それから』は代助の「近来の癖」となった心臓の鼓動をチェックする起床の場面で始まる。枕元の「八重の椿が一輪落ちる音」を「護謨毬を天井裏から投げ付けた程」の大音量で聞いた記憶を呼び起こす。昨夜も彼は「念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはずれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた」。目覚めて「赤ん坊の頭程もある大きな花

の色を見詰めていた彼は、急に思い出した様に、寝ながら胸の上に手を当てて、又心臓の鼓動を検し始めた」(一)。「赤ん坊の頭程」もある「八重の椿の花」は心臓の暗喩であり、赤ん坊を失った三千代の傷心・産後痛めた心臓と、代助の心臓、二つの心臓が無意識レベルで繋がっていることを暗示する。『草枕』で那美さんの隠された傷心を、赤い椿が鏡ヶ池の水面に血の如く滴り落ちる赤い点々で暗喩したと同じ手法である。書生門野に「先生、今朝の心臓の具合はどうですか」と茶化され「今日はまだ大丈夫だ」、「何だか明日にも危しくなりそうですな(略) 本当の病気につつかれるかもしれませんよ」、「もう病気ですよ」と返答する。

自分の心臓が三千代の傷心に感応していることに代助は気づかされるも、心臓を偏執的に意識して抵抗する。意識の力で心拍数を増減させるウェバーの鼓動実験まで試みる程彼の「頭」は「心臓」に抵抗するが、精神崩壊を起こす危険を察知して断念する。「頭」の独裁と暴走は『行人』一郎の言葉のとおり「宗教に入るか、気が狂うか」の極点に行き着くからである。代助の心身が次第に不調に陥るこうした詳細な描写は、内臓と血液循環を感情の起源とするW・ジェームズの「感情の末梢起源説」を漱石なりに消化応用したかたちで心身相関の様相を描いたと考えられる。1907年4月、東京美術学校文学会開会式の講演『文芸の哲学的基礎』中の「意識の流れ」説の援用は、この頃の漱石が文学を理論的に探求するうえでW・ジェームズに傾倒したことを示す(『それから』執筆は一九〇九年六月末から10月中旬)。

主題を提示する如く、先の冒頭に続く第一章で代助の「頭」が命ずる生存欲と「心臓」が命ずる自然(宇宙法則)との相克が語られる。

彼は手を胸に当てたまま、この鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像してみた。これが命であると考えた。自分は今流れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に応える、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘の様なものであると考えた。この警鐘を聞くことなしに生きていられたなら、一血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねてなかったなら、如何に自分は気楽だろう。如何に自分は絶対に生を味わい得るだろう。けれども一代助は覚えずぞっとした。彼は血潮によって打たるる懸念のない、静かな心臓を想像するに堪えぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寝ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此所を金槌で一つ撲されたらと思う事がある。彼は健全に生きていながら、この生きているという大丈夫な事実を、殆んど奇蹟の如き僥倖とのみ自覚し出す事さえある。(一)

代助は不随意筋で拍動する心臓を随意に「頭」で統御する不可能を望む程に欲の強い男である。美しい容貌と肉体に誇りを置き、帝大での「成蹟も可なりだった」(三)。富裕層の実業一家の次男坊で経済的にも何不自由ない。「馬鈴薯が金剛石より大切になったら人間はもう駄目である」(十三)と考え上手に「頭」で制御してきた優越的人生が、感情の座である「心臓」から揺さぶられ、「頭」を打ち砕かれて、「自然」が命ずる「愛」(十四)に巻き込まれていく過程が展開する。三千代に「わが安住の地を見出」(十一)出すもその引力を恐れ、倦怠感に襲われる薄弱な生活から己れを救い得るものは三千代への「滌らざる愛」

(十一) のみと認める迄追い込まれる様子がリアルな身体反応と感情の心身相関で克明に描かれる。最初は「微震」程度の「微塵の如き本体の分らぬものが無数に押し合っていた」

(六) 異状感の震源が徐々に顕在化する過程で「代助の脳は弓的の如く二重に仕切られた」感覚と不眠、内臓系（胃・腸・心臓）の不快感が高じる。

しかし三千代に「紙の指環」（生活費）を手渡した直後、代助は倦怠感を脱し「美しい夢を見たように、暗い夜を切って歩いた」（十二）。「夜半まで歩きつづけても疲れる事はなかろうと思」い、久しぶりに「安らかな手足を横たえ」て「薔薇の香のする眠」を日が高くなるまで貪る。脇道だが、「*arbitrator elegantiarum*（趣味の審判者）」の異名を持つ代助の書齋で展開する百合と薔薇の香のせめぎ合いは、「薔薇と百合の争い」（ヘブライ的古代の百合、十字軍遠征後のイスラム的中世の薔薇）というゴシック的図像学を作っている。ダンテ『神曲』天堂篇の愛と浄福の壮麗な薔薇、ゴシック建築の薔薇窓、ゴシックリバイバルのラファエル前派も百合と薔薇を象徴的に多用した。三千代が代助の書齋に持参する百合は「再現の昔」「自然の愛」への帰還を迫る暗喩である。

頭を放棄せざるをえない極限に押し詰められた時、代助は初めて「二人の間に燃える愛の炎」を認め「今日から愈積極的生活に入るのだ」、「自然の命ずるがまま」に「自然の昔に帰るんだ」と「胸の中」で宣言する。そして「安堵を総身に覚え」、魂は「幸」に満たされ、心身統合が一瞬の夢の如く現前した。代助の心身（感情感覚）の違和感をポータルとして彼は「自然」（天）へ開かれたのである。

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云った。

(略) 始から何故自然に抵抗したのかと思った。(略)

純一無雑に平和な生命を見出した。(略) 雲の様な自由と、水の如き自然とがあった。そうして凡てが幸であった。だから凡てが美しかった。(略)

「僕の存在にはあなたが必要だ。どうしても必要だ(略) 僕はこれで社会的に罪を犯したも同じ事です。然し僕はそう生れて来た人間なのだから、罪を犯す方が、僕には自然なのです。世間に罪を得ても、貴方の前に懺悔する事が出来れば、(略) 打ち明けなければ、もう生きている事が出来なくなった(略)」

「仕様がな。覚悟を決めましょう」

代助は背中から水を被った様に顫えた。社会から遂に放たるべき二人の魂は、ただ二人対い合って、互をの明く程眺めていた。そうして、凡てに逆って、互を一所に持ち来たした力を互と怖れ戦いた(十四、傍線論者)

二人は社会も肉体も超越した「魂」として天に則り、自然の命ずる永遠の関係性を生きる「覚悟を決め」た。ここに至って「三千代」とは、単に一女性の名前を意味しない。三千代すなわち永遠・天・自然・宇宙の別名であり、女性性と男性性を統合し宇宙法則に遵う魂の名である。三千代を愛する代助は魂の深い所で「自然を以て人間の拵えた凡ての計画よりも偉大なものと信じていた」（十三）。「自然の昔に帰る」とは社会規範の外にある真実在の天の法則、宇宙の真理に則ること、「則天去私」である。「凡てに逆って、互を一所に持ち来

たした力」の表現は、宇宙に生成する<sup>ボルテックス</sup>「渦」のイメージを喚起するが、漱石が留学中に数回訪れたテイトブリテン蔵のw・ブレイクとロセッティが描いたダンテ『神曲』のパオロとフランチェスカ（図版①②）を参照したい。恋人たちの靈魂が宇宙の<sup>ボルテックス</sup>「渦」に巻き込まれ漾う姿を描くが、『神曲』地獄篇第五曲の描写は次のとおりである。

小止なき地獄の烈風吹き荒れて魂を漂はし、<sup>めぐる</sup>旋りまた打ちてかれらをなやましむかの暴風<sup>はやち</sup>に負はれて来る魂を見き（略）我曰ふ、詩人よ、願はくはわれかのふたりに物言はん、彼等相連れてゆき、いと軽く風に乗るに似たり（『神曲』山川丙三郎訳）

旋風に苛まれる中で軽々と風に乗る「かのふたり」パオロとフランチェスカはヴェルギリウスとダンテに呼びとめられ『アーサー王物語』のランスロットとギニヴィアの逢瀬の場面を読んだ時二人が抗い難い恋に落ちた顛末を語る。ロセッティ画の注目点は三分割の右図、軽々恍惚と浮かぶ恋人たちを暖かく取り囲み飛び回る魂たちが作る緩やかな渦である。宇宙に漂う魂のイメージに通じる表現に酷似した表現を嫂の死直後の子規宛書簡に見出すからである。

「（略）耶蘇の子弟にも無之候へば天堂に再生せん事も覚束なく一片の精魂もし宇宙に存するものならば、二世と契りし夫の傍らか、平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと夢中に幻影を描きここかかしこかと浮世の羈絆につながるゝ死霊を憐み（略）」（一八八九年八月三日付正岡子規宛書簡）

これは『決定版夏目漱石』で江藤が嫂問題の論拠として三角関係の自覚を指摘した書簡でもある。本論で参照する目的は、漱石の抱いた「自然」や宇宙の<sup>ボルテックス</sup>「渦」に巻かれ漂う魂のイメージの手掛かりを得ることである。宇宙空間に漂う嫂の魂の行方を求める漱石が思い描いたイメージは図版①②の靈魂描写を彷彿する。約十年後の漱石がロンドンでこれらの絵画と対面した時イメージの一致に深く打たれたのか。あるいは嫂の死を契機に魂の行方を切実に求め図版が掲載された洋書を既に手にしたのか。いずれにせよ日本古来の靈魂観ならぬキリスト教由来のイメージである。

かつて武者小路実篤が『白樺』創刊号（1910）で『それから』に就て」を巻頭評論に掲げ白樺派の立場を表明した際、『運河』のごとき作品」と批判したことは知られている。「自分は運河よりも自然の河を愛する」、「自己実現こそ善だと考える」と武者小路は書いた。

「<sup>ヘッド</sup>頭」の力で自己に合うような社会に変革することが善であるとの主張であるならば、武者小路が『それから』の代助を批判するのは当然である。「自然」の意味を取り違えているからだ。『それから』に描かれている流れ、すなわち<sup>ヘッド</sup>「頭」の人代助を拉致し去る「自然の愛」は、小賢しい人間が作る人工の運河とは対極にある、無辺の大宇宙の圧倒的な<sup>ボルテックス</sup>「渦」である。



①W・ブレイク『神曲』挿絵 1827  
「愛欲の園・パオロとフランチェカ」  
テイトブリテン蔵



②ロセッティ  
「パオロとフランチェスカ」1855  
テイトブリテン蔵

### 三 「肉の臭い」と「誠の愛」 — 『煤煙』 批判と聖杯の探求

「自然の昔に帰る」決意をする以前の代助は森田草平『煤煙』をこう評した。「誠の愛で、やむなく社会の外に押し流されて行く様子が見えない(略)これを断行するに躊躇する自分の方にこそ不安の分子があつて然るべきはずだ」(六)。『煤煙』は『三四郎』終了直後の朝日新聞に漱石の推薦で連載された。『煤煙』終了直後の『それから』連載で漱石は弟子の作品を批判した。今度はおれが「誠の愛」で男女が「やむなく社会の外に押し流されて行く様子」を正しく描いてみせると読者にインデックスを付したように受け取れる。

しかし、確認しておきたいことがある。森田草平と平塚らいてうの起こした塩原事件の本質を漱石が理解したか疑わしいと論者は考えている。『らいてう自伝』を読むと、草平の親代わりとしてらいてうの父(政府高官)や恩師成瀬仁蔵(日本女子大学校長)の間に立ち事件後の收拾に当たった漱石には草平・らいてうの結婚という解決しか念頭になかったことがわかる。本論で確認する漱石的テーゼと、現実の漱石の凡俗的態度との乖離に吃驚せざる

を得ない。漱石門下の問題児草平は郷里で既婚、東京では別の女性と同棲中だった。坐禅に打ち込み見性した後のらいてうは、世俗的解決を図る漱石に強く反発し失望する。『草枕』の愛読者だったらいてうは禅的機峰の鋭い那美さんの頭ヘッドと心ハートの葛藤を描き得た漱石に強い尊敬の念を懐き、漱石こそ己を理解する稀有な師に相違ないと期待して草平のエゴの求愛を受けて立つ「闘い」(『煤煙』)を決行した。らいてうの「闘い」は『煤煙』ではむしろ一定の理解を以て描かれている。

「何日ぞや御同行した日暮里の両忘庵は、私がたゞ物好きから彼処あそこへお連れ申したとも思つていらしたかも知れませんが、あれは私が三年前夢中になつて坐つて見性した所なのです。それで先生と闘ふ時、あの家を一度見て置きたくなつたのです。先生もお聞き及びでせう、釈宗活と云ふ坊さんを。(略)最早私には何物も残されない、あるものは只恐怖と不安との連続である。静に自分の最後を味はつて死ぬと云つたけれど(略)もう叶はぬ。私は先生の御手にかゝつて死ぬ一殺して頂く」(『煤煙』三一)

らいてうは自刃を覚悟し母の嫁入り道具の懐刀を帯びて草平との闘いに臨んだ。「頭エゴ」を滅却(去私)した見性後のらいてうは草平の頭エゴの挑む求愛の愚劣さを承知の上で二十二歳の純粹無垢セルフの自己を以て真正面から受け精一杯闘った。これがらいてうからみた塩原事件である。「呆れた禅学令嬢」など新聞各紙のらいてう評のほうは漱石よりらいてうを理解している位である。現実に対処する際の漱石の凡俗性が露呈したのか。二十一歳で見性したらいてうと比較すると、漱石が釈宗演老師の許で行った円覚寺での参禅体験が見性の門口にも至らなかったことは『門』宗助に描かれた如くである。らいてうを見性に導いた釈宗活は奇しくも漱石が参禅した釈宗演の愛弟子である。漱石の宗教的限界とも言えるこうした凡俗性は、代助に「肉の臭いがしやしないか」(六)と言わせたことから推して知るべしで、らいてうの精神性に対する漱石の無理解の度合が知れる。加えてらいてうが事件後も清い身を保持していた事は『らいてう自伝』で確認できる。

「肉の臭い」は「神聖」な恋愛と対極にあるものとして、『こころ』「先生」の手紙にも見出せる。「お嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした」(『こころ』下十四)。

「肉の臭い」に動かされる草平へのアンチテーゼとして、漱石は魂のみで繋がる「誠の愛」を描いてみせた側面もあるだろう。しかしらいてうを失望させたとおりの女性の精神性に対する漱石の理解は三千代には見出せない。『それから』三千代は、真摯に現実を生き貫く女

性ならぬ三千代さんぜんだい、すなわち天・自然・宇宙あるいは永遠の女性性、宇宙法則の別名である。

そこに論者はアーサー王伝説の「聖杯の探求」と同じ西洋文脈をみる。聖杯Holy Grailとは、表向きは最後の晩餐でイエスと弟子たちが交わした杯カップを指すが、その深層は、少なくとも漱石(挿絵・装丁の橋口五葉、高く評価した青木繁を含め)が絶大な影響を受けたラファエル前派Pre-Raphaelite Brotherhoodにおいては、正統キリスト教が切り捨ててきた女性性を意味する。西欧古来のアンダーグラウンドの秘教エゾテリズムを保持するタロットカードにおいてはこの秘密はハート=カップと解釈され



と同様、宗教的秘密結社「P. R. B.」のアイコンである女性原理の象徴は「聖杯の乙女」(図版③)で、P. R. B. が標榜した秘教的本質は女性性・魂の復権である。併せて代助が実家の客間に描かせた「ヴァルキイル」は選別した勇士を死に導き天界で蜜酒を振るまう北欧神話の「死の乙女」<sup>フムフアタル</sup>で図像は「聖杯の乙女」に酷似する。

もう一点漱石・草平・らいてうをめぐって指摘する。漱石は草平に「何うだ、君が書かなければ、僕がさう云ふ女を書いて、見せやうか」と言い、漱石が解釈した「さう云う女」としてらいてうは『三四郎』の「無意識<sup>a unconscious</sup>の偽善者<sup>hypocrite</sup>」美禰子になったと草平は証言する(『漱石先生と私』一九四七、のち『夏目漱石』)。美禰が三四郎の宿命<sup>フムフアタル</sup>の女であることは論を俟たない。『煤烟』が漱石の推薦で『三四郎』と『それから』のつなぎに連載された経緯は先にふれたが、「此の男も世の中から葬られたんだから、小説でも書くより外に生きる道はなからう」との親心だったという(草平『自叙伝』)。実社会での漱石のこうした父権的態度や凡俗性はここで置く。

本論の立場で読み取っておくことは、「誠の愛」で「社会の外に押し流されて行く」姿に「自然」(宇宙の眞実)の本質は存するという、通奏低音の如く諸作品に流れる漱石独特の傾きである。この漱石的なテーゼは『行人』一郎から二郎へはつきり語られる。

「お前パオロとフランチェスカの恋を知っているだろう(略)夫の名前を世間が忘れてパオロとフランチェスカだけ覚えている(略)人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が実際神聖だから(略)大きな自然の法則を嘆美する(略)道徳に加勢するものは一時の勝利者には違いないが、永久の敗北者だ。自然に従うものは、一時の敗北者だけれども永久の勝利者だ」(『行人』「帰ってから」二十七・二十八)

代助が魂の深いところで信じていた如く、世間も「自然に従う」恋愛こそ「神聖」と知っているゆえ「大きな自然の法則を嘆美する」と一郎は言う。代助にはパオロとフランチェスカのように恋愛の極点で生命が断たれる恩寵は

与えられない。与えられずとも、彼の心臓<sup>ハート</sup>が発する「自然の愛」は「天」(宇宙)が発する生命の<sup>ホルテックス</sup>渦に巻き込まれざるをえない。代助の「頭」が作り出す「不安」は「頭」に飛び込むあらゆる「赤」でくるくると回転し始め、「しまいには世の中が真っ赤になった」。「自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗って行こうと決意した」(了)。こうして代助の「自然の愛」は一瞬の「幸」<sup>プリス</sup>にすぎず、この高等遊民は半狂乱となった挙句に社会へ放り出された。現実社会と苦闘する彼は『門』宗助の穴開き靴で雨に難儀する憐れな腰弁生活、敗北者の姿となるのだと従来どおり読むこともできる。しかし本論の立場は「心臓」こそ父母未生以前本来の面目の自己を知っており「幸」<sup>プリス</sup>に導くものであると確認することである。代助も日露戦後に露頭した明治近代の父権制擬似家族国家の歪みを痛烈に批判し、そこに出れば自己<sup>セルフ</sup>を阻まれ苦闘を余儀なくされることを深く恐れながら「自然の児」となることを決意した。心臓<sup>ハート</sup>に促されて「自然の命ずるまま」に「頭」の「私」<sup>ヘッド</sup>を去り、宇宙的な生命の渦に身を



③D.G.P.セッティ  
「聖杯の乙女」1867年、ミラノ、パナマ



ゆだねる「則天去私」を生きざるを得なくなった。晩年の漱石の和辻哲郎（『こころ』の学生「私」のモデルともされる）宛書簡や小宮豊隆が建立した「則天去私」神話に俟つ以前、「則天去私」は語られている。「頭」を去り宇宙と共振すること、「心臓」の声に導かれよとの漱石的なテーゼである。

おわりに

『こころ』で「先生」は恋愛経験のない「私」に「恋は罪悪ですよ。よござんすか。そして神聖なものですよ」（上）と強く論し手紙にも綴った。「先生」がお嬢さんに抱いた「信仰に近い愛」「神聖な感じ」（下十四）とはなにか。ルドルフ・オットーは「聖なる」は道徳律の拘束性から「超加」したもの、倫理的なものや善なるものとは無関係であると明言する（『聖なるもの』第二章）。義務や道徳的要素から区別される「超加」だけを指示し合理性を差引いた凡ての宗教の最も深いもの、それを欠くなら宗教でなくなるような事柄である。

「先生」は赤の他人に遺書を書き残すという非合理性、「超加」を体現する。「私の心臓を立ち割って」、「自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけ」、「私の鼓動が停った時」に「心臓の底から真面目な継承者の「あなたの胸に新しい命が宿る」（下二）ことが「先生」の願いだからだ。父母を失い叔父に裏切られ地縁血縁を断って上京した「先生」はお嬢さんに傷心を癒され結婚した。「血」を断ち切った「先生」の最期は、明治国家の天皇と赤子の擬似家族性、戸籍と家制度で個を縛り徴兵する「血」の論理を否定する生涯の総決算となる。漱石も徴兵忌避のために北海道へ「送籍」（『吾輩は猫である』）した。「先生」の自殺は心に導かれる自由の継承を願う儀式、自由な個と個の新しい盟約としての「血」の儀式となる。全生命を注ぎ込んだ文字により「心」の自由は「私」に継承された。「私」と奥さんとの結婚で「先生」の血の継承の儀式は完成すると小森氏は結論づけた。「人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」（マタイ十九・五）「だから二人はもはや別々ではなく、一体である」（マルコ十・八）。当時の日本に珍しいキリスト教的婚姻を「先生」と奥さん、「私」と奥さんは選び取った。いっぽう「頭」で生きる孤独な求道者「K」の「心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められていた」（下二十九）ゆえ、誰に血を注ぎかけることなく唐紙に迸った一筋の他は「彼の血潮の大部分」が「蒲団に吸収されてしまった」（下五十）。

「恋愛」は明治に訳出された語で恋愛を神聖とする思想も西洋由来のものである。聖なる結婚と神の恩寵との結合はキリスト教成立時からある思想だが、恋愛は神聖なものであるとの概念が成立したのは、十字軍を背景とした騎士道に基づく宮廷風恋愛を歌う吟遊詩人の抒情詩が現れた中世（十二世紀）である。さらに「聖なる心臓」はイエスの人類に対する愛の象徴である。荊冠で括られ剣で刺し抜かれ、炎に包まれた流血する心臓、あるいは百合の花といった図像で表現される。秘教的には心臓は血の器であることから、聖杯（器）は反転して女性性の暗喩となる。アーサー王が受けたロンギヌスの槍の傷を癒せるものは聖杯だけである。彼に癒しがたい傷を負わせた聖槍（ロンギヌスの槍）は、ローマ兵ロンギ

ヌスが十字架上で息を引き取ったイエスの脇腹を刺して死を確認したとされる槍だが、「所有するものに世界を制する力を与える」との伝承から男性原理の暗喩であると理解できる。アーサー王の傷を癒すことのできる聖杯は、秘教的にはマグダラのマリアを指し、マグダラはイエスと魂を分けた伴侶、魂の片割れ、そして永遠の女性性である。よって、聖杯伝説において探求される聖杯とは、傷ついた男性原理の女性原理による統合を意味する。キリスト教が抑圧してきた女性的靈性を回復することである。

キリスト教のドグマの成立過程で秘された真実に気づき、「全キリスト教世界が女性性の誤用を疑うべきとき」（トム・ケニオン『マグダラの書』）が来ているという。漱石は留学中に触れたオックスフォード運動やラスキン、モリス、そして P.R.B の画家たちの絵をとおして直観的に自己の魂の深部に通じるものとして、秘教的なキリスト教を吸収したように思われる。これは漱石の正統的キリスト教への反発と通底する問題であると論者は考えている。

#### [引用文献]

- ・夏目漱石『こころ』ちくま文庫・解説、小森陽一
- ・夏目漱石『それから』新潮文庫
- ・夏目漱石『行人』岩波文庫
- ・夏目漱石『文芸の哲学的基礎』講談社学術文庫
- ・『漱石書簡集』岩波文庫・三好行雄編
- ・『漱石全集』第九巻・岩波書店
- ・森田草平『煤煙』岩波文庫
- ・森田草平『夏目漱石』一・二・三、講談社学術文庫
- ・小宮豊隆『夏目漱石』上・中・下、岩波文庫
- ・江藤淳『漱石とアーサー王傳説』講談社学術文庫
- ・江藤淳『決定版 夏目漱石』新潮文庫
- ・デカルト『情念論』岩波文庫・谷川多佳子訳
- ・W・ジェームズ『心理学〈上〉』岩波文庫・今田 寛訳
- ・オットー『聖なるもの』岩波文庫・山谷省吾訳
- ・ダンテ『神曲』岩波文庫・山川丙三郎訳
- ・ルージュモン『愛について—エロスとアガペ』上・下、鈴木健郎訳・平凡社ライブラリー、一九九三
- ・『武者小路実篤全集』第一巻「『それから』に就て」
- ・平塚らいてう『元始、女性は太陽であった—平塚らいてう自伝』〈1〉〈2〉〈3〉〈4〉 国民文庫、一九九二
- ・河村錠一郎『ラファエル前派とその時代』東京新聞、一九八五
- ・飛ヶ谷美穂子『漱石の源泉 創造への階梯』慶應義塾大学出版会、二〇〇二

- ・フレッチャー他『アレゴリー・シンボル・メタファー』平凡社、一九八七
- ・ゴドウィン『聖杯伝説—その起源と秘められた意味』原  
書房、2010
- ・マイケル・ベイジェント他『レンヌ＝ル＝シャトーの謎イエスの血脈と聖杯伝説』林和彦  
訳、柏書房、一九九七
- ・トム・ケニオン他『マグダラの書』鈴木里美訳、ナチュラルスピリット、二〇〇六
- ・The Energetic Heart, Deborah Rozman, HeartMath Institute, 2018